

『マネーの正体～地域通貨は冒険する～』
デイヴィッド・ボイル著 松藤留美子訳 集英社 2002年

知識科学研究科 250030 澤浦文章

序章：現代の錬金術師を探す旅に出る (11p)

<この本におけるテーマ>

現在、通貨の流通量は、毎日 1兆 3000億ドルと推定され、世界銀行はその 99%を投機的なものとみなしている。つまり、実経済を動かす真の取引にかかわるものは、たったの 5%に過ぎないということだ。(14p)

お金は今や、心理的な存在となってしまった。ならば逆に、ぼくらのほうでお金の心理学を利用して、お金をもうけてやろうではないか。

自分でお金を作ってしまうなんて、実現可能なことだろうか？たくましい創造力が作り上げた能天気な夢物語にすぎないのだろうか。だが、これこそが本書のテーマだ。

<貨幣の起源>

- ・ 記憶、警告を意味するラテン語に由来する。とする説
- ・ ジュピターの妻、女神ユノ・モネタの名前に由来する。とする説 などなど

『イリアス』によれば、貨幣誕生前は価値は牛によって測られていた。

ラテン語で貨幣は“ pecunia”

牛を意味する“ pecus”を語源とする・・・結婚・慶事・同盟・神々にささげる犠牲などのしるし：社会的な関係のしるし

ぼくらが貨幣をうまくコントロールできないことが、問題なのだろうか？

それ以上に重大な問題が隠れている。

- ・ 貨幣では見えないものがあるという点 ex 熱帯雨林の消滅
- ・ 貨幣の量の分配がひどく偏っている

ぼくは・・・この立場から、もっと人の役に立つ貨幣、オーウェルのいう『残ましい心』から人を守るのに役立つ貨幣をつくる方法を知りたいと思っている。

ぼくが書きたいのは貨幣を作ること。というのも、もしも貨幣を作ること。というのも、もしも、貨幣を作ることが、銀行や政府にもやれるほど簡単なものとしたら、ぼくらだって自力で同じことができるのではないかと考えたからだ。これこそが、LETS(地域交換取引システム：Local Exchange and Trading Systems)のアイデアなのである。(25p)

<地域通貨LETSについて>

- ・ LETS: 1970年代末、カナダ西部のブリティッシュ・コロンビア州で生まれた。
- ・ 初めて出現した LETSは「グリーン・ダラー」という名を与えられた
- ・ デビット・ウェストン（研究者）発案
- ・ 1980年代初めに現在のような形に
- ・ スコットランド系カナダ人のマイケル・リントンのインスピレーションによって LETSは世界中に広まる

(26p)

- ・ オーストラリアのブルーマウンテン LETS: 2000人もが参加している
- ・ 著者が LETSにはじめて出会ったのはニュージーランド、オークランドのグリーン・ダラー・エクスチェンジ
現在ニュージーランドの人口の 0.1%の人々が既にグリーンダラーを利用している

- ・ マイケル・リントンが LETSをイギリスに紹介したのは 1985年の TCESサミットのとき。
- ・ 1992年不況に押される形で突然スタート。クリスマスの頃には 40の運営組織が稼働した。当時すでに地域通貨の流通量は年 10万ポンド相当までに達していた。
現在 450種類以上の地域通貨が流通している

(26p~)

第 1章： ワシントンの旅する：お金は時間

『タイム・ダラー』の著者であるワシントン在住の法学教授エドガー・カーンに会いに行く。

<タイム・ダラーについて>

タイム・ダラー：カーン博士の入院の経験から生まれたアイデア

失業者（“余剰人員”）・・・「だからわたしは、社会が支払う金をもたないときでも、人々に仕事を与えると同時に増える一方のニーズを満たすにはどうしたらよいかという問題に取り組んできた」

人口構成の変化・・・「・・・かなりの割合の人が年老いて弱り、医療からちょっとした人間的触れ合いまで、さまざまなサービスを必要とすることになるだろう。だが、こうしたサービスには、現在の経済システムでは対処しきれないのである。博士の考えるお金は、ふつうのお金と違う。家庭やコミュニティで行われるような行為に対して支払われる。互いに助け合ったり、子供の面倒をみたり、買い物を代行したり、単におしゃべりしたりといった行為を対象としているのだ。良き隣人となるように人々を促すためのお金。それも、ふつうのお金では実現できないような形で、必要なものを時間によって支払うという形で実現するのだ。カーン博士は、このお金をタイム・ダラーと名付けることにした。」

(35~ 36p)

< 仕組み >

- (1) 自分の地域で行われているタイム・ダラー・プロジェクトのところへ行って、どんな仕事をしようと思っているかを伝える
- (2) コンピュータに入力されタイム・ダラー事務局が仲介する
- (3) 登録したサービスを受けたい人が現れたら、タイム・ダラー事務局から電話確認がくる
- (4) 話がつけば、支援に費やした 1時間につき 1 タイム・ダラーが支払われる。

稼いだタイム・ダラーの使い道

- ・ 別のメンバーからサービスを受けるのに使うこともある
 - ・ 親戚のお年寄りにプレゼント
 - ・ 貯蓄しておく
 - ・ わすれる etc
- タイム・ダラーの預託額のうち実際使われるのはたったの 19%

< タイム・ダラーに関して危惧された問題 >

- ・ タイム・ダラー銀行で取り付け騒ぎがおこったらどうするか
- ・ 稼ぎ出されたタイム・ダラーがすべて病院や政府機関に対する潜在的な請求権となった場合に州には法的な責任はあるのか

< ボランティアの問題 >

- ・ ボランティアに訓練を受けさせるべきか
- ・ 訴訟をおこされたらどうするか
- ・ システム悪用・不正利用するボランティアがあらわれたらどうするのか

マイアミのタイム・ダラー・プロジェクト

ボストン・ニューヨーク市・ワシントン DC・セントルイス・サンフランシスコ

< 危惧への対応 >

- ・ ミズーリ州：タイム・ダラーの預託額を保証している。
- ・ 『ボランティア問題』のために保険に加入させてる
- ・ 過去 10年以上にわたって訴訟は起きていない

タイム・ダラーへの課税問題

：アメリカの国税庁はサービス・クレジットは課税対象とならないと判断し、今にいたる。

エドガー・カーンの著書に寄せた紹介文のなかでラルフ・ネーダーの書いていること：

タイム・ダラーは「よき行いに対して、インフレに強く一貫性のある報酬を与える。価値の変わることはないパワフルで、信頼できる報酬だ。これに対して、市場経済は利己的なものに対して報酬を与える」のである。もしも貨幣が - 買い物マニアの道具ではなくて - 人と人との関係を築く手段として始まったとするならば、タイム・ダラーは、貨幣の根源にさかのぼるものといえるだろう。(43p)

以下、筆者とカーン博士との対話。

「一番大切なのは、どうやってコミュニティを作り出すかってことだ。わたしたちが再建しなければならないのは、生活の基盤となっている“社会的資本(ソーシャルキャピタル)”

なんだ。信頼とか、相互関係とか、社会参加と言ってもいい。・・・」(48p)

「ドルが価値を認めるのは、希少なものだ。だが、こうした生活上の要素は供給不足になることはないだろうから、市場経済で価値が出ることはないだろう。」

(以上 48p)

<CCNについて>

大手タイム・ダラー銀行のひとつであるコーポラティブ・ケアリング・ネットワーク(CCN)
: ユナイテッド・シニア・ヘルス・コーポラティブ(USHC: 高齢者保険協同組合)という
巨大な慈善団体が運営している組織

- ・ CCN・・・1993年設立
- ・ 1万 5000人の個人と 50の多様な会員組織の参加を目標・年に最高 70万時間の労働をタイムダラーで払うことを目標 運営は計画通りに進んでいない。
- ・ 現在会員 1600人

<ここの特徴>

- ・ 55歳以上の人にしかタイム・ダラーを貯めることはできない。それより若い人は放棄するか、サービスを利用しそうな親戚のお年寄りなどにプレゼント
 - ・ タイム・ダラーをもっていない人にも支援の手をさしのべている
 - ・ 「タイム・ダラー」という名前を使っていない。ダラーのかわりにクレジット
 - ・ あらゆる人の時間が同じ価値をもつことになる革命的な世界である
- (56p~)

<問題点>

もしも、アメリカの別の地域に引っ越したら、タイム・ダラーはどうなるのか?一緒に持っていけるのだろうか?

実際あったケースでは本人が引っ越しても娘が残っていたので特に問題は起こらなかった。

CCNの運営費用はどこからでるのか?

「あのですね、予算の話はするつもりはないんですよ。」

<エッジウッド・マネジメント・コーポレーションの例(62p~)>

12州で低賃金の賃貸アパートを運営している。

リンカーン・ウェストモーラント地区における活動: 子供を対象(貧しい母子家庭がほとんど)

トミカ・スミスという名の元看護婦の女性

- ・ スタートから3ヶ月後一度崩壊の危機(ボランティアは去り、タイムダラーは使われずじまい)
ボランティアが訪れたら興味のないうちに手早く仕事を与えるようにした
- ・ 6週間の子供向けのサマーキャンプ参加のチャンスをあたえることでタイム・ダラーの

価値の底上げをはかった

サマーキャンプ用に徴収しなかった本物のお金の額は、ボランティア活用のおかげで節約できた事務所運営費の金額と相殺される

・ 今では参加するボランティアの数も 30人以上に増えている。

「・・・自己評価がとても低くて、自分に価値なんかなくて、社会に貢献できることなんか無いと思っている人もいますが、そういう人たちも、今では自分に能力があるんだと実感するようになってきたんですよ」(64p)

< メリーランド大学高齢化研究センターでのインタビュー (65p) >

キャスリーン・トリート氏

センターの研究者たちの報告は、タイム・ダラーというアイデアに学問的なお墨付きを与えただけでなく、ふだんなら全く興味を感じないような人々を“ボランティア”に引き込み、留まらせるタイム・ダラーの魅力 マイアミのプロジェクトでは、ボランティアの離脱率は年 5%にすぎない を紹介し、タイム・ダラーを稼ぐことが高齢者の健康と寿命の増進に役立つことを示したのである。

管理費の問題：ある程度はタイム・ダラーで支払えるが、やりすぎるとインフレを起こす
研究者達の意見では最低 5万ドルは必要。

研究者の意見：あらゆるサービスについて収支をきちんと計算するように設計する方法
もう一つはエドガー・カーンの考え方。まったく制約のないやり方で、クレジットの収支をきちんと計算しない。 収支の計算なしで価値が生まれるの？

タイムダラー銀行は最終的にすべての帳尻をあわせるの？単に善意をあつめたものなの？

帳尻があわないこともあるだろうが、それでいいんだよ。」byカーン

ポンドの価値の裏付け

銀行に対するぼくらの信頼と、毎日使っているお金に対してぼくらが抱く漠然とした信頼

タイム・ダラーの価値の裏付け

システムに対するぼくらの信頼と、サービスを行おうとする地域社会の意志。すなわちお互いの信頼 (69p)

第 2章：さらにワシントンの旅する：お金は心のエネルギー (71p~)

カーン：経済には 2種類ある

フォーマルの経済

：人を金持ちにしたり、必要な物資をもたらしたりするネットワークの経済

インフォーマルの経済：いわゆる“コミュニティ”

：人を教育し、育て、養うようなネットワークの経済

フォーマルの経済が繁栄するにはインフォーマルの経済のエネルギーが活発でなくては

ならない。

しかし現在はコミュニティが消えてしまった。

どうすれば、誰かを犠牲にすることなくコミュニティを復活することができるのか？

エドガー・カーンの戦い

- (1) あらゆるものに価格がなければならぬと信じる、疑り深いエコノミストに対して、このもう一つの経済の存在を証明すること
- (2) 通常お金で報酬を与えたり活性化できないものに対して、タイム・ダラーならば報酬を与え活性化できると証明すること。

< “共同生産” の原則 (75p) >

- ・ ハビタット・フォー・ヒューマニティ (アメリカの低家賃住宅提供慈善団体) の例
：住宅ローンの頭金をタイムダラーで受け付けている
他の人の家を建てるために 500時間分の労働を提供すればよい。

専門サービスへの支払いをタイム・ダラーで受け付ける等

・・・弁護士や市当局はタイム・ダラーによる負債を創造することができる

住民が地域社会の向上に手を貸すことで支払える負債

：現金で請求されたら支払う余裕がないかもしれないが、タイム・ダラーで請求されれば、地域生活を向上させながら同時に自分も恩恵を受けることが可能となる

「・・・経済は半ば盲目だから、こうした隠れた資産に注意を払わない。つまり、人々の時間、技能、エネルギー、相手に好意を返したいという意欲 - こうした資産は注目されないのがある。もうすぐカネがなくなるとわかっているのに、経済は資産をほったらかしておく。それに対して、タイム・ダラーは資産をリサイクルして機能させる方法なのだ。」

若者たちにタイム・ダラーを提供するというアイデアを実現しようとするなら、もっと別の方法で経済に活をいれなきゃ駄目だ。タイム・ダラーが思わずほしくなるような価値あるお金だ、と納得させなければいけない。

< コンピュータ活動家のケン・コモウスキーへのインタビュー (84p) >

- ：LINCT連合(コミュニティ遠隔コンピューティングのための学習・情報ネットワーク連合)
ケンとエドガーが設立
アメリカの一般企業や政府機関が廃棄する中古 PC150万台を貧困家庭一世帯ごとに配る計画
：あくまでタイム・ダラーで稼ぐ、ここではコンピュータを自らマスターすることで稼ぎ出す (週 20時間自宅学習)

< ワシントンDCの少年裁判所の活性化のためにタイム・ダラーを使う実験 (90p) >

：タイム・ダラー計画が、少年裁判所の業務の一部を引き継ぎ、ティーンエイジャーの陪審員を導入してその報酬をタイム・ダラーで支払う計画

「ここでもう一度、タイム・ダラーの核心である、昔ながらのモラルの問題に立ち返ってみ

よう。タイム・ダラーは善悪すべてに関わるものだけれど、忘れ去れた財産 過小評価された人間の時間や技術 の有効利用を促進する一種の通貨を作り出すものでもある。ワシントンで一番無駄に放置されているのは若者なのだ。」

第 3章：フィラデルフィアを旅する：お金は重荷（106p～）

ニュージャージー州カムデンにあるタイム・ダラー銀行を訪ねる
カムデン：アメリカで最も貧しい四つの都心地区のひとつと名指しされるような地区

<ヘルピング・ハンズ・プロジェクト>

“ルルドの聖母”メディカル・センターに付属する高齢者プロジェクトとして運営
クリスティン・スリアノ：このプロジェクトの主催者

・地域通貨やタイム・マネーをあきらめていた。

：ボランティアのほとんどが別の町にすんでいる サービス・クレジットが必要ない

・・・純粋な慈善行為

ヘルピング・ハンズは新たな貨幣を生み出す場ではない。地理的な意味でコミュニティの中に存在していないからだ。

<エレン・ディーコンへのインタビュー（119p～）>

巨額な遺産相続のアドバイザー？

「お金は価値ある道具だと思うわ」でも、自分が必要とする以上にお金を手に入れようとなれば、他人から価値を奪わざるを得ないのよ。」

142pの問題提起：富を増やす自然な方法など果たしてあるのか？

第 4章：ニューヨークを旅する：お金は宗教（143p～）

NYSE(ニューヨーク証券取引所)を見学する

アメリカの財政赤字（163p）

ドルの信頼：金に裏付けられているわけでもないし、銀行の金庫にあるカネに裏付けられているわけでもない。

巨額の負債を返済するというアメリカ政府の保証を世界中が信じているという、ただ1点に基づいている。

<ウーマンシェアの例（165p～）>：ニューヨーク・アップパーウエストサイド

・ ジェーン・ウィルソン（仕立て屋）、ダイアナ・マコート（大工）が創設

・ 女性専用貨幣という発想は、1991年に端を発する

：都会のなかで孤独を強いられる女性が多いという問題意識（168p～）

ウーマンシェアは、このような状況を何とか打開しようとして始まった。多くの人々を集めて、互いに助け合おうという趣旨の下、他の人の手助けをした場合には、点（クレジット）が付き、そして、そのクレジットは、グループ内の他の人に手伝わってもらった場合の支払いに利用することができる。＝タイム・ダラー、LETSに似ている部分

だが、タイムダラーと異なり、ここでは実践すべき“モラル”のようなものは定められていない。このアイデアは、孤独という問題を解決するためのものだからだ。

- ・ 少人数の複数グループで構成：メンバー同士親しくなれるようにという意図。
- ・ グループは 100人でメンバーの募集を締め切った。それ以降はウェイティングリストに載せる。
- ・ 同時に加入希望者には新しいグループを自分で組織するように勧める。

運営費：会費として年 50ドルと 6時間のクレジットを組織が徴収する

「ただの助け合いグループじゃないか、という読者もいるだろう。そうかもしれない。だが、助け合うことで、お金でないお金、つまりクレジットが生じる点で違う。そして、そのクレジットがコミュニティをぐるぐると巡っていくのだ。クレジットは、人に手渡されるたびに助け合いの行為を生み出していく。クレジットは、お金のパワーを利用したものだけけれど、結果は全く違う。その上、ウーマンシェアには堅苦しさがみじんもない。ぼくはこの点が気に入っている。」

ウーマンシェアの意義：

貨幣経済の初期の段階：その機能の一つとして“人々を結びつける”という機能
…そんな遠い過去の記憶と出会ったと見える。

ウィリアム・ブルーム『貨幣、心、精神』

「実は単純な話なのだが…貨幣が生み出されたのは、人間関係を円滑に促すためであって、交易や商取引を促すためではなかった」

<ブルックリン“メンバー・トゥ・メンバー”というタイム・ダラー銀行の例（176p）>

- ・ アメリカに 4つしかない社会 HMO(健康管理機関)の一つ、エルダープランの一つ
- ・ メンバー健康保険料の一部をタイムダラーで支払いができる
- ・ クレジットの貯めておける期間：限定せず。何かあった時でもサービスが継続されるように計らう。

「そうですね。タイム・ダラー・プログラムで重要なポイントの一つは、参加者に自分が必要とされているという実感を与えてくれる点です。」

「…みんなが自発的に参加し、自分にできる範囲で提供し、必要なものを受け取るんですから。みんなが能力に応じて提供し、必要に応じて受け取るという考え方ですね」

<ニューヨーク連邦準備銀行を見学する（190p）>

第 5章：イサカを旅するお金はエネルギー（200p～）

<イサカ・アワーの実例（ニューヨーク州イサカ：コーネル大学のある街）>
ポール・クローバー創設

『イサカ・マネー』誌に掲載したイサカ・アワーのメリット

- 1．人とその技術と生産物を、求める人々に結びつけることによって、新たな雇用を創出する。
- 2．廃棄物を町外に搬出したり埋め立てたりするのではなく、イサカ内でリサイクルする
- 3．新たな顧客を開拓する
- 4．無利子の信用を創造する
- 5．貯蓄をインフレから守る
当面棚上げ（当初の目論見は、1イサカアワー = 10ドルとしたものの、現実にドルの価値とのリンクが重要となってきたため。）
- 6．国家経済の及ぼす衝撃からイサカを守る

1991年 10月 29日に、キャベッジタウン・カフェで食事をしてアワーで支払う客が現れた：
イサカ・アワーが初めて機能しはじめた日。

93年：町の外からまともな注目を浴びるようになる・・・助成金を支給されるようになる

ポールの心配の種：インフレ

「もしも政府が紙幣を刷りすぎたり、国民が通貨を信頼しなくなったりすれば、貨幣価値は下落する。これは誰でも知っていることさ。もちろん、そんな絵にかいたようなひどいインフレなんて、イサカじゃ起こるわけがない。なにしろ、まだインフレを起こすほどイサカ・アワーを印刷していないんでね。でも、もし住民がアワーの交換価値に疑問を抱くようになったら、蓄えなくなるだろうし、受け取りも拒否するだろうね。」

ではイサカ・アワーの通貨供給量はどのようにやって決めるのか？

「彼の話によれば、最初に発行された札の 50.5パーセントが 1991年以来還流してきたそうだ。実際に必要な作業は、世論の動きに注意を払うこと、自転車にまたがり町中くまなく走り回ること、そして、紙幣がどこかに停滞しないようにすることなのだ。」

・現在アワーは法律でも保護されている：アワーを偽造した場合にも、懲役 7年！（232p）

<イサカ・アワーの前にも地域通貨の実験が行われていた（236p）・・・>

オーストリアのヴェルグルという町

“ マイナスの利子 ” を持った通貨の流通

：シルビオ・ゲゼル（ドイツ出身のアルゼンチンの元貿易商）のアイデア

1923年 8月に議会職員の給料の半額をこの新しい紙幣で支給

しかし 9月にはオーストリア中央銀行がプロジェクトを止めた。

アメリカでも同じような動き

：アーヴィング・フィッシャー（イェール大教授）のアイデア
しかし 1933年 3月 4日、ルーズベルト大統領がこれらの代用貨幣システムを新たに開始することをすべて違法にし、すでにあるシステムも短期で終了させる手続きをとった。

地域通貨の流通によってコミュニティが内向きになり、視野の狭い自己満足に陥り、外部から買うのを拒否して内部で間に合わせるのではないのか」という批判

むしろ、それぞれのコミュニティの生産性が高まり、その結果として今まで以上の流通が盛んになり豊かになる（240p）

通貨供給量の問題：ドルと同様にアワーの供給も実際の取引に見合う量でなくてはならない・・・そうでなければデフレ・インフレが起きる：アワー銀行、中央銀行では問題となる
実際カナダのノバスコシア州で流通しているマリティーム・アワーではこのようなインフレに直面したと報告されている。

タイム・ダラー、LETSでは問題にならない（240p）

：タイムダラーや LETS通貨は未済額ときっちり同額なのだから、支払いが終われば消えてなくなる。

アメリカの経済学者ロバート・パットナム

：一番成功した場所は「市民活動」が活発なところだという（241p）

・・・むしろ流通しているのは、その精神（イサカにある昔ながらの“住民活動”の伝統）といってもよいだろう。（242p）

第 6章：ミネアポリスを旅する：お金は情報（247p～）

<タイム・ダラー銀行の例>

ミネアポリス

エド・ランバート（ミネアポリス地域開発者協会）

貧困を終わらせるために計画されたコモンウィールというプロジェクト

MORE(セントルイス市グレイスヒル)：タイムダラーで支払えるサービスを集めた分厚いイェローページを提供している。

・現在 1万人のボランティアがタイム・ダラーを稼ぎ出し、かつ支払っている。

ミネアポリスには 2つタイムダラー銀行がある

そのなかの1つピープロ・ヘルパーズ・コミュニティ・タイム・バンクに出かける

ガニラ・ピョルクマン＝ボブ

・複数の世代が関わっている、最初のメンバーが高齢者だったわけではないのに、高齢者から若い世代へ何が提供できるかという問題を中心に据えて活動を展開してきた。

・タイムダラーの常として、一時間はみんな同じ一時間。

< コモンウィール・サービス (257p) >

: 1997年の春、ミネアポリスのリンデール地区で最初の実験プロジェクトがたちあがる

コモンウィール・サービス・ダラー (CSD)

: 単に貧困撲滅のための手段ではない。通常のドルとタイム・ダラーが同時に扱える、新しいタイプのクレジットカード

稼いだタイム・ダラーをクレジットカードに記録できる

ジョエル・ホドロフ (元ラディカル運動家)

企業の過剰生産品を地域通貨で販売できないだろうか。

…普通に広告するとかなりの金額が必要だ

「1996年 1月 23日、ヘネピン郡政委員会は、コモンウィールによる初の二重通貨による地域経済開発ネットワークの立ち上げに協力することを全会一致で決定した」と、郡議会は発表した。郡から最初に提供される補助金は 2万 5000ドル。

経済には二重の難問がある。過度の豊かさが存在すること、それと同時に欠乏をかこつ人々が存在すること…この二つの問題だ。」

このプロジェクトに参加したミネアポリス大学付属ヒューバート・H・ハンフリー公共政策研究所の創設者ハーラン・クリーブランドの上に対する回答

「一つの問題は、欠乏を始め人間の基本的なニーズが、従来の経済的対策や主義や制度では対応しきれないということ。もう一つの問題は、既に存在すると認められている資源（労働力や、土地・水・エネルギー・原材料などの天賦のもの）ですら十分に活用していないということである。…一方を解決せずに、他方を解決することはできない。政府はドルの発行量を増やすことは出来るが、常に、ドルの価値を引き下げる危険がこれに伴う。…だが、アメリカ政府のできないこと（なぜなら、通貨価値を下げることなく通貨供給量を増やすことが出来る実質的なモノやサービスを勝手に作ることはできないからだ）でも、市民なら実現できる。人間のニーズを満たしたいと望むサービス組織や生産能力を十分に発揮したいと望む企業を通じて、市民は、政府のできないことを実現できるのである」

- ・ カードの名前：コモンウィール・ヒーローカード
- ・ 同時に二種類の通貨を取り扱える＋一回の取引を両方の通貨で決済することが可能
- ・ 決済費用をクレジットカードと同じように差し引くことができる。
- ・ 小売価格の 5%が自動的に差し引かれる。
- ・ 決済手数料（1ドルにつき）

運営費 20セント＋カードを発行した地域のコミュニティー組織 10セント＋スポンサー（オックスファムのような困窮者救援機関など）に 10セント＋のこり 60セントはコモンウィールやその他さまざまな銀行、パートナーへと支払われる。

遊園地キャンプスヌーピーの例

水曜でも週末でもかかるコストは殆ど同じ 20ドルの乗り物クーポンを 10ドル＋10C \$Dで売る

スヌーピー側が 9ドル

システム側が決済手数料として 1ドル、コミュニティー・サービスを支援する組織の側が、

またその 1部をとる。

貨幣とは：現実の富のシンボルとして + 価値の情報

…複雑に絡み合った存在

今や貨幣の 2つの機能が再び別物として分化してきた

ネットワークを介して流される、コンピュータ上の情報、クレジットカードを利用するたびに、銀行口座から送金がおこなわれるたびに、転送される情報：それが貨幣ということになる

貨幣は、情報の一つの形態にすぎない。人間そのもの、人間のもつ技能、テクノロジー、そうしたもののこそが富なのだ。そして、貨幣と富の二つを組み合わせれば、必要なものは生み出せる。

「資源は希少だ」というのは誤っている！

「貨幣とは、人間の力を展開していくための単なる情報システムだ」(278p)

条件は揃っている。過剰な設備や在庫を抱えた企業が何社かあるし、時間のある人もたくさんいる。未だ満たされないコミュニティのニーズもある。原材料とエネルギーも十分ある。ないのは貨幣さ。そもそも、貨幣はコミュニケーションと協力のツールなんだ。それに、現代のような情報化時代には、コミュニケーションと協力の新しいツールは、それこそたっぷり存在するわけだから、後はひとつ選んでスタートすればいい(284p)

「新たな通貨とは、複雑な適応システムなんだ。少なくともこの国では、家族やコミュニティに対して責任を負うように解かれてきた。なのに、われわれは自分を分裂させ、拡大家族的な考え方を失い、コミュニティをばらばらにしてしまった。そして、コミュニティのそうした側面は、今ある生活を守っていくためにも非常に重要なものだ。それが今、危機的な状況にあるわけだけれど、地域通貨が解決策になるような気がするんだよ。」(288p)

「貨幣っていうのは、単なる承認なんだと思うよ。他人に認めてもらったしるしなんだ。何を認めてもらったか、なぜ認めてもらったか、それは問題じゃない。何がしかのモノや何時間かの労働を贈り物として受け取ったというしるしのさ。」
(289p)

第 7章：パークシャーを旅する：お金は野菜(247p)

マサチューセッツ州グレート・バリトンで開かれる地域通貨をテーマとした会議に参加する。

<パークシェアの例(304p ~) >

：グレートバリントンでの地域通貨

1992年の初め 6週間にわたって、地元の商店 10ドルの買い物をした人に 1 パークシェアが

配布された

オーストラリアの貨幣研究者シャン・ターンブル

貨幣には、次のように 5つの種類がある

- ・ ポンドやドルといった政府の貨幣。これもまた、シャンにいわせれば“ニセ金（ファニーマネー）”だ。なにしろ、いかなる意味でも現実とつながりがないのだから。
- ・ タイム・ダラーのような社会的貨幣。これは、社会的な支援に対する対価の支払いに利用することができる。
- ・ 人間の労働に基づいた労働貨幣。イサカ・アワーや LETSがこれに当たる。
- ・ 生産に対する融資のための地域通貨。農家保護紙幣や、エネルギー・ダラーなどのエコロジー・サービス貨幣などがその例。エネルギー・ダラーとは、風力発電所から前払いで電力を買うための紙幣だ。
- ・ 企業貨幣。たとえば、テレホンカード、IBMマネー、飛行機のマイレージ、マック・スクリップなどだ。デジタル革命のおかげで可能となったものが多い。

地域通貨の特徴

- ・ 必要に応じて発行できる点
 - ・ 利子を生まない点
 - ・ 限定した地域内だけで流通する点
- 地域の経済を支えて自立を支援するもの

第 8章：もっと豊かになるために（339p～）

（357p）

地域通貨 持続可能なコミュニティを目指すことが目標となる

タイムダラー：社会的な持続可能性を求めて、従来の経済から取り残された人々に“貨幣”を提供する試み

ウーマンシェア：地域における心の持続可能性とでもいうべきものを目指す試み

アワー、LETS バークシェア：地域の経済的な持続可能性を通じて、環境の持続可能性を追求する試み

コモンウィール：貧困問題に取り組むことによって、社会システム全体を支援する試み

- ・ 地域通貨を裏付ける信頼とは？（357p）

タ：地域住民の責任感 ウ：地域の友愛 L：地域住民の技能 ア：地域の生産能力

バ：地域の農産物の価値 コ：地元机上の過剰生産を振り向けてもらうという約束

現代の錬金術師達の革命の手順（358p）

- （1）貨幣は豊かさや価値と同じではないことを認識する
- （2）自分達が価値を置くものを交換可能な地域通貨に変える
- （3）住民のニーズに応え、住民の生活を守るような別の社会経済を、地域通貨を使って

活性化する

- (4) 地域通貨を主流システムに取り込むことによって、国際経済における膨大な生産性と過剰生産を利用可能なものにする。

地域通貨は・・・住民相互の信頼、共有財産、そして住民自身の技能と創造力から生み出している。(363p)